

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 久米池周辺を歩く

講師 末光 甲正さん(川添文化協会副会長)

日時 令和元年11月17日(日)



共催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

目次

9	8	7	6	5	4	3	2	1
久本古墳	山下古墳	本覚寺	諏訪神社古墳	諏訪神社	石清水八幡宮	久米池	久米山	久米池南遺跡
・ ・ ・								
1 3	1 2	1 0	9	8	7	5	4	1

1 久米池南遺跡

高松平野北東部で最大の溜池である久米池の南側に位置する、標高五十メートルほどの丘陵上に、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が展開していました。

弥生時代には、丘陵の尾根線上に複数の竪穴建物・掘立柱建物が築かれました。高所に所在する立地から「高地性集落」と呼ばれる集落のあり方です。また、土壙墓どこうぼと呼ばれる、地面に直接穴を掘った墓も見つかっています。

特筆すべき遺物に、多量の鉄製品が挙げられます。弥生時代の日本では製鉄技術が確立されておらず、これらの鉄製品の素材は遠隔地との交流の中で入手したものであると考えられます。高松平野で弥生時代に多量の鉄製品を保有していた集落は他に知られておらず、久米池南遺跡の特質を考える上で重要な資料です。

その他に注目される遺物として、絵画土器片が挙げられます。土器の表面に彫刻された絵は、完全でなく、二つの土器片に描かれた部分が残っているにすぎません。一方には、建物の屋根が大きく描かれ、もう一方には、はしご状のものが描かれています。この二つをあわせると一つの絵の一部分になるものと思われれます。絵の題材は、三間の平入構造の掘立柱建物で、中央部にははしごがついたものと思われれます。この建物は、集落にとってきわめて重要な建物であつたに違いありません。集落の象徴的存在であつた建物を描いた特別な土器を作り、それでもつて祭礼を執り行うか、あるいは重要なものの保管に充てた等のことが考えられます。

2 久米山

久米山は、高松市の東方に位置し、標高五十二・三メートルの花崗岩系の山地でふもとに池や河川を要し、自然に恵まれ風光明媚で景観も良く、さぬき百景の一つに選ばれています。

大正三年（一九一四）山頂につくられた広場は、以来運動会が行われるなど、住民に親しまれた場所であり、また、古墳が発掘されるなど川添文化発祥の地でもあります。

平成五年に地域まちおこし事業として既設の遊歩道が整備され、展望台等が新設されました。遊歩道沿いには四国霊場三二八十八ヶ所の地蔵が並んでおり、訪れる人も少なくありません。

3 久米池

久米池は、旧古高松村（高松市高松町、春日町、新田町）で最も大きいため池です。堤高五メートル、堤長六百四十メートル、満水面積十八・六ヘクタール、貯水量三十五万二千立方メートルを誇ります。

池創築に関する記録はありませんが、寛永年間（一六二四〜四四）、讃岐の藩主 生駒高俊（第四代）が伊勢より西嶋八兵衛を呼び寄せ、干ばつ救済のために築



造させたため池の一つであると伝えられ、地域の人々に「久米さん」と呼ばれ親しまれています。また、南側に佇むと、水面に屋島が逆さに映る「逆屋島」が見え、風光に富む久米池は、新さぬき百景の一つに選ばれています。

★久米池のはなし く 『川添の民話』よりく

東山崎町の石清水八幡宮の脇にある久米池は、むかしは窪地でここに久米寺というお寺があったそうです。(中略)近郷の人々はこの寺に参詣、そこから屋島寺の方に回っていたのだそうです。久米池の由来は古代にアマツクメノミコトという天孫族の一族が住みついでて一帯が久米となり池の名になったというのです。

(中略)源平合戦のころ屋島に陣取る平家を攻めるため源氏の将兵がこの寺で必勝を祈願したともいわれ、源氏の大將義経は、愛妻になったこの東の大内の丹生の出の静御前とも会っていたといっています。

久米山の西端に諏訪神社が勧請されていますがその辺から久米寺を経て屋島に向かうルートが当時の往還だったといっています。

4 石清水八幡宮

〔祭神〕応神天皇・仲哀天皇・神功天皇

〔境内末社〕若宮神社

社伝によると、天平十一年八月十五日創祀、弘仁元年（八一〇）弘法大師がこの地に来られ、靈威を感じて参拝されたと言われています。

また、一説には、貞観元年（八九五）この地方の本山（元山）郷が、山城の石清水八幡宮の神領になったので、その御分霊を勧請したものであるとも伝えていきます。

永正年間（一五〇四〜二二）戦災で焼け、久本の地（新田町）に移りました。元和六年（一



六二〇）九月と、寛文四年（一六六四）とに、それぞれ社殿を改修し、元禄六年（一六九三）四月八日、もとの久米山に社殿を新築して移りました。

もとは、久米山八幡と言いましたが、明治五年（一八七二）に今の社号に改められました。大正十四年（一九二五）社殿が炎上したため、御神体を付近の諏訪神社に移し、翌十五年十月、本殿ができあがりました。

5 諏訪神社

〔祭神〕建御名方命

〔例祭〕十月五日

〔面積〕五千百八十七平方メートル

天正十年（一五八二）三月、武田勝頼が天目山に戦死したとき、家臣らが勝頼の遺児桃千代丸をもちたててひそかに四国へ逃れ、山田郡本山村（木田郡山田町



本山)の豪族、大熊備前守に助けを求め、この地に住みつきました。

武田氏の歴代の守護神である、信州の諏訪大明神を勧請してこの社を建てたものといわれ、その由緒を記した社記は、安政二年(一八五五)の火災で焼けてしまったといわれています。

6 諏訪神社古墳

この古墳は、諏訪神社の本殿が建っている場所に所在していました。平成二年の発掘調査によると、古墳の形は不正形な円形で、直径十二メートル前後の規模があり、三基の竪穴式石室をもち、墳丘裾に列石を巡らせていました。中央部と北側の石室内には、遺体をくたたま入れた棺を固定するための粘土が残されていました。出土遺物は、中央部の石室から碧玉製の管玉が一点、北側の石室からは、赤色顔料を塗った土器の枕が、それぞれ見つかっています。

石室の構造、墳丘の形、大きさ、出土遺物などから四世紀の初め頃に造られたと考えられ、付近一帯を治めていた首長の墓と考えられます。近くには、高松市茶臼山古墳をはじめ

め多くの古墳があり、周辺の丘陵は、古くから墓域として利用されていたことがわかりま
す。

7 本覚寺

慶長七年（一六〇二）に生駒家家臣佐藤掃部に

かもん

よって創建された寺院で、かつては城下の御坊町

（当時の町名は片古馬場町）に所在しました。法

華宗の寺院で、尼崎本興寺・京都本能寺両寺の末

寺です。

当寺は、高松藩八代藩主松平頼儀の子頼該

よりのり

よしかね

（左近、金岳公子）と関わりの深い寺院として知

さこん

きんがくこうし

られています。頼該は文化六年（一八〇九）年に



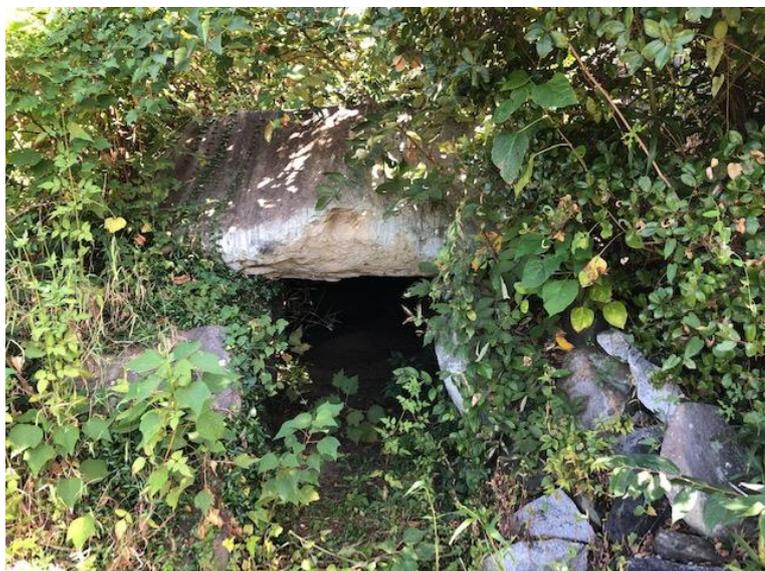
生まれますが、頼該より先に生まれた頼儀の子が早世であったため、生母山崎綱子は懐妊中に本能寺第七十世の日顛上人（にちてんしやうじん）に出産・成長の祈願を依頼しました。その日顛上人が高松に帰ることになった際に、頼該が一時本覚寺に住まわせています。頼該は法華宗を深く信仰していたわけではありませんでしたが、天保九年（一八三八）に本覚寺講頭原茂兵衛に法華経を借用し訓読していた際に法華宗入信を決意し、翌十年に当寺で入信の儀式を執り行っています。教学の研究に熱心であった頼該は、本興寺にある日隆聖人（にちりゆうせいじん）（本門法華宗・法華宗本門流の祖）が著した教えをはじめ、数多くの教義に関する書物の書写を行っていきます。また、慶応四年（一八六八）一月、朝敵とされた高松藩の藩論を開城にまとめたこととで知られています。同年五月頃から体調を崩し、八月に亡くなりました。西山崎町本堯寺（ほんぎやうじ）が墓所（令和元年七月十九日に本堯寺松平頼該霊廟が国登録有形文化財の答申を受けた）、当寺が菩提所（位牌を安置し、菩提を弔う）となり、遺言により頼該が書写した書物の多くが納められています。また、用人林本助が拝領し、後に当寺に奉納された頼該直筆の御題目陣羽織なども所蔵しています。

なお、山号を真如山と称していましたが、頼該が国柱山も追加し、現在では真如・国柱山と称しています。

また、頼該は嘉永五年（一八五六）にそれまで中ノ村の大雄寺を再興する形で高橋にあった庵を塩屋町に移築し大雄庵を建て、本覚寺がこれを管理しました。頼該は全国の勤皇の志士を大雄庵で庇護しており、同庵に「勤皇之志士遺跡」の石碑がありました。現在当寺に移設しています。

8 山下古墳

立石山塊から西へ延びる丘陵の先端に位置し、新田町山下に所在する横穴式石室が開口した古墳です。墳丘の盛土は、ほとんど流出しており、墳丘規模・形態は不明ですが、玄室の天井石を巨石一枚で架構した巨石墳で、玄室規模が周辺の古墳の中では最大のものとして知られています。石室は両袖式の横穴式



石室で、ほぼ真南に開口しており、現存長は九・〇メートルになります。玄室は長さ五・〇メートル、幅二・五五〜二・八五メートルで、高さ二・五〜二・八メートルですが、流入土があることから現状より高く、三メートル近くになります。玄室の天井石は長さ四・五メートル、厚さ〇・八メートル、幅三メートルの巨石一枚で架構しています。羨道部は残存四メートル、幅一・五メートル、高さ一・二メートルで、玄室同様流入土により高さは高くなります。なお、巨室の石材はすべて安山岩へ統一されています。古墳に伴う遺物は出土していません。

9 久本古墳

久本古墳は、墳丘も石室も保存状況が良好で、原型をよく残しているので、早くから知られていました。

北方の山下古墳とともに巨大な横穴式石室をもつ巨古墳で、石室は全長一〇・八メートル、遺体を埋葬する玄室は長さ四・六メートル、高さ三・五メートル、通路にあたる羨道部は、長さ六・二メートル、高さ二・一メートルです。玄室及び羨道部の天井は、いずれ

も巨大な自然石で覆っています。この石室は、羨道部両端の封じ石が使われ、南面して開口しているので、ここから自由に出入りすることができます。戦時中には一時防空壕として使用されていました。

玄室奥に、県内唯一の石棚がみられ、棚の下には、遺体を安置する陶棺が置かれています。石棚は、九州北部をはじめ、和歌山県・徳島県の古墳に多く見られ、広範囲にわたる文化交流がうかがえます。また、仏教文化の影響が色濃い承盤付銅鏡が、県下で初めて出土しています。須恵器が大量に副葬されており、古墳が六世紀末に築造され、七世紀初頭まで追葬が行われていたことが判明してい



ます。

久本古墳には「村の祭礼などのとき、塚が膳・椀を貸してくれていたが、村人が壊すなどの不始末を起こし返さなかった後は、膳・椀を貸してくれなくなった。」という「椀貸しの伝説」が伝えられており、このことから地元では「椀貸塚」と呼ばれています。

★参考文献

和田晃尚 平成十三年 『金岳公子』 法華宗四国教区

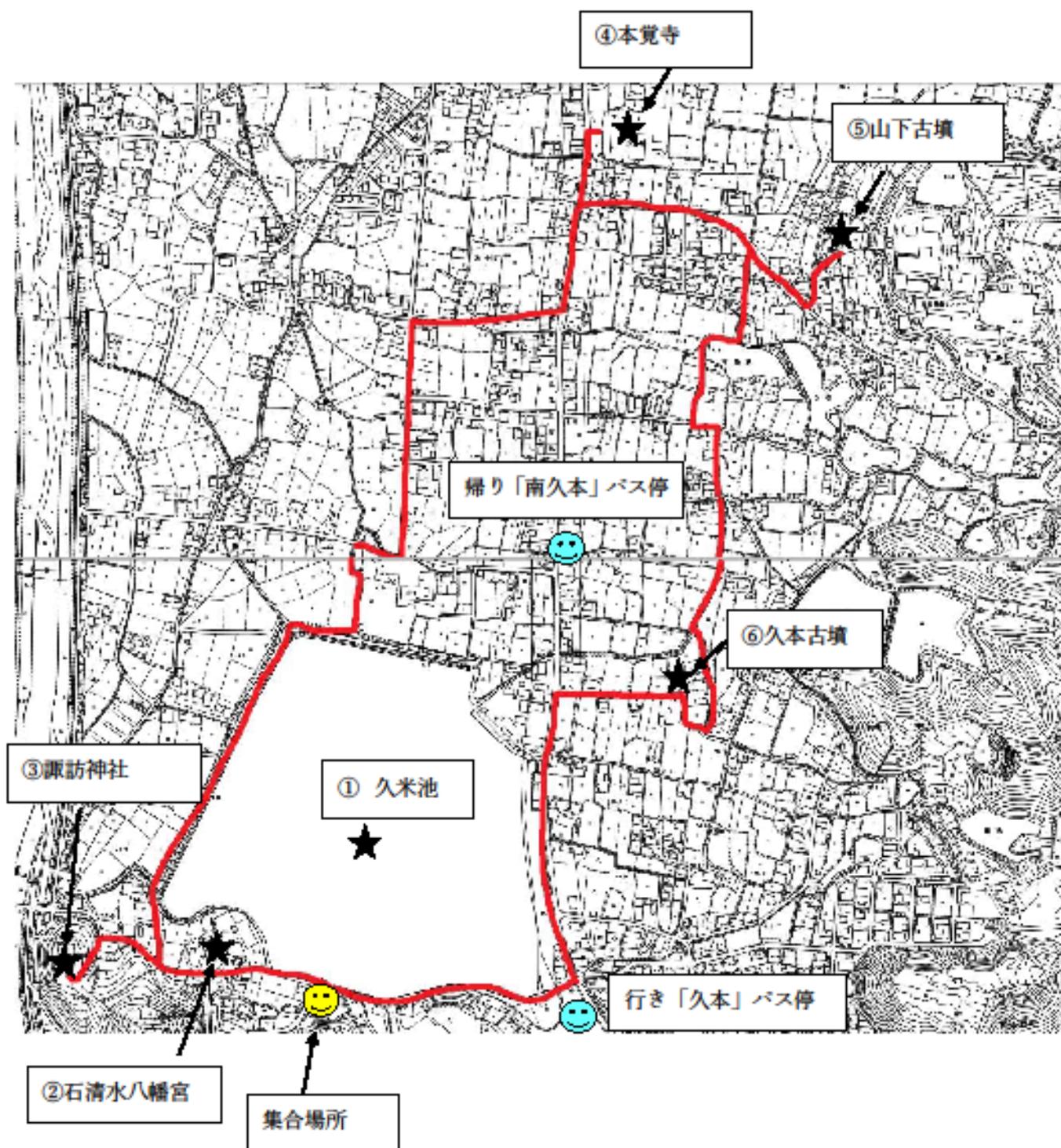
昭和四十一年 『新修高松市史』 『高松市

昭和五十一年 『古高松郷土史』 古高松郷土史編集委員会

平成元年 『久米池南遺跡発掘調査報告書』 高松市教育委員会

平成十六年 『高松市指定史跡久本古墳』 高松市教育委員会

令和元年11月17日(日)ふるさと探訪「久米池周辺を歩く」探訪コース



11月17日（日）復路

・ことでんバス庵治線・大学病院線・

南公文（12:21 発）→瓦町（12:49 着）→高松駅（12:59 着）

❁ 次回のふるさと探訪は…（予定）

◎テーマ：「**新指定国史跡 高松松平家墓所（靈芝寺）周辺を訪ねる**」

◎と き：令和元年12月8日（日）午前9時半～正午

◎集合場所：JR 造田駅

◎探訪先

① 靈芝寺

▶高松松平家2代目藩主の頼常、9代目藩主の頼恕の墓所があります。

墓所は、普段一般公開されていませんが、特別に観ることができます！

② 願興寺

▶毎月8日にのみ公開される重要文化財 聖観音坐像を拝観できます！

◎参加費：無料

★公共交通機関の御案内

・JR 高德線 引田行 高松（8:33 発）→造田（9:14 着）

★注意

☆広報「たかまつ」12月1日号に開催案内を掲載予定です。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。